

Title	<書評>S・ギーディオン著「機械化の文化史」：もの いわぬものの歴史
Author(s)	増山, 和夫
Citation	デザイン理論. 1977, 16, p. 121-124
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53673">https://doi.org/10.18910/53673</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

S・ギーディオン著

「機械化の文化史」

——ものいわぬものの歴史——

Siegfried Giedion;  
Mechanization Takes Command, a contribution  
to anonymous history.

Oxford University Press, 1948.

この本は上記の通り、1948年に書かれたものであり、あらためてここに紹介することもないようにも思える。しかしながら、原著の発刊後およそ30年経た今日になって、デザイン研究所の手によって翻訳されたということは、わが国の工業デザインの歴史を考える時、大変意味深いものがある。このおよそ30年の隔りは、単に時間的な問題ではなく、デザインについての考え方の問題であり、デザインの本質にかかわる問題である。

かつて、インダストリアル・デザイナーが、「流線型」を携えて、製品のセールスマンとして登場した時以来、根強く残っていた表面的装飾家としての色彩も、ようやく薄れ、「Industrial Design」も「工業デザイン」というより「産業デザイン」と訳されるようになり、「産業をデザインする」という言葉さえ聞かれるようになった。そして、デザインは、もはや技術的な問題ではなく、社会的な問題としてとりあげるべき時期に来ているとも云われている。即ち、ものをどのように造るかということよりも、何を造るかということ、あるいは、そのものを造るべきか、造らないでおくべきかということが非常に重要になってきている。それは単に生産技術、企業経営の問題ではなく、人間社会のあり方にかかわる問題となりつつあるのである。

この本は、まさに、このような問題について考える時、大変示唆に富むものである。著者の云う「いままでその歴史的な意義について問題にされてこなかったようなつましい物を取り上げ、それらのものが寄り集って、現代の生活様式の基層を形作ってきたこと、日常生活に見られる小さな道具も集まると、われわれの文明圏に生きる者すべてに影響を与えるほど大きな存在になる<sup>(P4)</sup>」という言葉は、この本が、L・マンフォードが云うように、前世紀の産業史に対する卓越した貢献であるのみならず、著名な作家や作品、あるいは、デザイン運動を中心にした、いわゆるデザイン史とは違った意味でデザインの歴史を語る

ものでもあることを示している。

著者は、機械化を肯定も否定もせず、歴史的な事実にそくして、人間生活に大変身近なものが機械化され、あるいは、機械化の影響を受ける様子、それらのものを通して、機械化がわれわれの生活様式におよぼした影響、それが、われわれの住まいに、食べ物や家具に与えたインパクトを調べることが、「ものいわぬもの歴史」の研究であると云う。そのためには、まず一般の人が、自分たちの仕事や発明がたえず生活のパターンをつくり、かつ作りかえているのだということを理解することが前提となる。「道具と物は、世界に対する人間の基本的な態度の産物である。この態度が歴史のコースを設定し、そのあとに思考と行為が従う。絵画、発明、そしてあらゆる問題は、ある特定の態度を基礎にもっており、この態度なくしては、それらはそもそも生み出されなかったと云ってよい<sup>(P4)</sup>」という一節は大変意味深いものである。

この本は、7つの部と結びからなる。最初に研究態度と研究方法ならびに主要な項目についての要約が行われている。続いて、機械化の起り、機械化の手段、機械化と有機体、機械化と人間環境、機械化と家事、入浴の機械化、最後に結びとして、均衡のとれた人間の重要性が論じられている。

著者は、あらゆる機械化の根底をなす概念は、運動の概念であるとし、最初に、14世紀から現代までを貫いている運動の研究、即ち、運動の視覚化について述べている。彼が運動の研究を機械化の基礎におくのは、連続的な運動を視覚的に分解し、全体を部分の総和とするところに機械主義的な世界観の始源を見るからである。このことは、Bergsonの「変化の知覚」が所謂機能主義的な考え方と深くかかわるものであるとすることと同じ意義を持っている。彼によれば、生産の機械化の第一歩は、工程をいくつかの作業部分に分解することなのである。そして、ゲシュタルト心理学や生物学等が全体を部分の総和以上のもと考え、機械化が生命体に出合ったところで先に進めなくなり、有機体は完全に構成単位に分解できないことが実証されるにおよんで、機械主義的概念が終焉を告げたとする。彼にとって、機械化のはじまりは、「手」が機械にとってかわられ、作業が自動化され、機械的な正確さを得られるようになるときであり、そして、19世紀の後半、アメリカで高度な機械化が始まり、全面的な機械化の最初の兆しはアッセンブリーラインであり、そこでは工場全体が一つの噛み合った有機体として統合されていると見る。

この機械化の時期、あるいは機械の出現した時期をいつとするか、そして、機械化の意味のとらえ方などは、後に、L・マンフォードが、「機械の神話 (The Myth of The Machine, Technics & Human Development)」、 「権力のペンタゴン (The Pentagon of Power, The Myth of The Machine II)」で論じるところとは少し異なる。L・

マンフォードは、機械の出現を石器時代にまで遡って考え、機械化の反生命的な性格を究明しようとしている。しかし、S・ギーディオンが「人類の環境の危険な傾向が存在すると全責任が機械化に転嫁されるのが普通だが、実際には、それは、機械化の到来以前に、機械化とは独立に表面化している」とい<sup>(P7)</sup>、「19世紀の機械化がこうした傾向を促進したことは疑いないが、その傾向は機械化の衝撃がおよぶ以前に家の室内に顕著に現われていた<sup>(P7)</sup>」とするところを、L・マンフォードは、機械化の到来以前に、人間そのものが機械化していた、そして、そこにこそ、機械のもっている反生命的な性格の元兇があるとしているのであって、基本的には、両者は共通したところを持っているのである。S・ギーディオンが、ものの存在に先立つ人間の基本的な態度の問題を指摘し、器具の機械化に先立つ作業過程の組織化を取り上げたのに対して、L・マンフォードは、その作業過程の組織化こそ、人間を部品とする見えない機械であると言ってしているのである。このように両者の共通性を問題にする限り、S・ギーディオンの方がより先見的であったことを認めなければならないだろう。しかしながら、彼がものの存在に先立つ人間の態度の重要性を指摘し、「機械化は純粹に人間の精神の産物である<sup>(P691)</sup>」としながら「機械化は、水や火、光と同じように一つの手<sup>(P691)</sup>段である。それ自身は盲目で方向性をもたない」とすることには少なからず矛盾を感じざるを得ない。この点に関しては、L・マンフォードの指摘する「見えない機械」の存在を認める方が納得し易いように思える。そして、両者がともに云うように、人間の心、および態度こそ、機械をコントロールする上で最も重要なものであると云えるし、人間が再び人間となり、人間的尺度で自らを律し、「人間にまかせよ」の気概を持って、未来を切り開いて行くべきであると云えるのであろう。

個々の機械化の過程について論じられているところで、われわれにとって興味深いことは、今日一般に普及している道具や機器の原型が図版とともに示され、それが生れるに至った背景が詳しく述べられていることである。そして、その原型のもっている決定的な重要さと、その原型が生れ、やがて実用化されて行く過程での人間生活あるいは技術とのかかわり方などは、われわれデザイナーにとって大変示唆に富むものがある。例えば、真空掃除機や洗濯機の発達に電気モーターのはたした役割の大きかったことと共に、電気モーターが開発される以前に真空掃除機や洗濯機、さらには、皿洗い機等の原型があったという事実、あるいは、古代のからくりの製作に費やされた発明の才能と、そのからくりが機械化に際して果たした決定的な役割、そこに生きた人間の内面的な方向づけや生活に対する考え方から、われわれが新しいものを発想する上で教えられるところが多い。

また、一旦原型が定式化されると、その後は、技術者の好奇心の赴くままに、ものだけが一人歩きして行く傾向があることも忘れてはならない。

食品生産の機械化は、単に作業過程を手作業から機械による完全自動にしたばかりでなく、食品そのものの形を変え、味を変え、それがやがては、人間の嗜好をも変えるものであったこと。あるいは、召使の問題や女性の社会的地位の問題に端を発し、「家政学」を生み、家事、台所作業の組織化と台所道具の機械化、やがては住宅の設計に影響を与えるという一つの流れ。単に衛生観念や習慣としてのみならず、社会制度、宗教、医学等とかかわってきた「入浴」の歴史。これらのことからだけでも、一つのものの存在が、そのまわりの同種または同系列のものとかかわるのみでなく、非常に根深く、巾広い背景をもっていることが理解されるであろう。

このことから十分察せられるように、われわれにとって必要なことは、デザイン・プロセスをいまあるものから始めるのではなく、原型の定式化まで遡って考えるということである。われわれは、単純にももの形を変えたり組合せを変えることに終始するだけでなく、問題の中心は人間にあり、デザインの問題は、もの問題であるより先に人間の問題であることを認識し、もっと根深く人間生活とかかわるところまで掘りさげたところから一つのものを考えなければならない。

(京都工芸繊維大学 増山和夫)

## 彫 塑 材 料 合 成 樹 脂 成 型 材 料

睦石齋は……

# 井上顔料株式会社

京都市山科区 清水焼団地 電 592-0225